曙文庫

慈照院喜山道慶と御改名
あるべきよし室町將軍源義政公源氏花形
乃奥儀を述ひらを聞書
三年より千葉龍ト如くなる
もうね書あるべきこと也
御傳曰ものに無院乃
御説也愚按いつれも乗
ぶ卜先生の伝也こゝろ人深く
味ひ古人の花に信實を
さとる所也

安政辰の秋　山陰

曙文庫

桐壹

源氏流極秘奥儀鈔

松應齋法橋千葉龍ト

源氏流極秘奥儀鈔　　松應齋法橋千葉龍卜

桐壺

御傳曰是は桐壺とゝ名よりて桐を生る也桐鳳凰八聖代ならでハ出ぬ位あるゆゑ也御簾の花第一の物とせり祝義なるもの也

愚按曰桐壺更衣よ手車の宣旨とゝゝるあり小車とゝゝ竹縁あり又三位のゝゝ名あり桐壺帝世の此世を去給ふ時の事也佛花と心得し又桐壺帝世の方よ源氏給ふ時の事也

弘ゝ歌

ゝゝきゝの緑むすゝ風の吹よ小萩ゝもとをわもひをれ

又源氏七の巻中文姫とゝく

とゝゝ時ハ必萩を生る也

ゝゝ学文始あり琴笛の吹ゝも丹を埋ゝたと云時ハ必松を主として生る也松ハ琴に準ず下準之　又鴻盧鈔

ゝく唐人人相を見ゝゝく源の氏を弱ゝる事あり此時花白花よかぎる也

紫色の花を生し　歌よ

考證かゝの如し

以上桐壺一巻のうち

帚木

御傳曰是ハ低く指花を高く又高く指花を下よさして身本の方ゝゝ弱ゝ向やゝにさゝ也元の心も奈ハ上ゝ

むゝもゝ　つゝもゝ　ゝゝ心ゝ　ゝ法ゝ也又三品五品の竹花ゝ

法ゝ品定とゝゝ事ゝ

よゝゝと知し

愚按曰此巻あま取物ぐるを云源氏ハ物いゝとして

大内とのゝ所よおそれ　頭中將ハゝまの

よりて知へし

愚按曰以巻あまた物がたりと云源氏の物いとして
大内とのゐ所よりまいられつるに頭中将うまのかみ
とゝ式部とゝ〳〵天上人にて〻ゐるきの物語あり
梅を生るゝ〻〻式部の物法文たゝせのむすめのゝ
梅を好交木とゝふよりゐる准ふ　又なでしこを生
るハ頭中将の物語也　又菓を活るゝうまのかみの物語也
菓の宿とゝふるゝ　車よ和琴笛とあ給るゝあり
ゐるハ玉極あぐるもよりゝ　菓と和歌とゝるゝ定るゝ
ゝとの移り月も元ゝ宿るゝ所なるき人をひきやとゝるゝ
とゝふ意なり　あるる女のゝる菓和歌あれハ也

空蟬

御傳曰三きよ御木ゝ活く花の方に少〻遠く新て
指〻〻花根本ハ紅のきれぬやゝ指〻〻ゐるハ源氏の
かくれ思あふ内侍也又杜丹　杜若　梅もとき　百年者
ゝと身を替てゝゝとゝふ歌よりて也　杜丹ハ新だの
萩のふくよるゝ准ふ　杜若ハ本花ハ多ゝて蓋の
かゝゝ花咲を空蟬の君の身を蓋のふこゝゝふ梅もどき
万年者ハ皆實と身と刮ゝゝゝ活る也
愚按曰車の簪ゐ名皆ゝ世ゝ萩を活るもよ
白花を活る水を黒とゝて空蟬と新だの物と基を
用ゐとす　此巻ハ皆文のゝる也　庭のゝれちどりのれハ廣にゝ

夕顔

御傳曰是ハ時の珍花きゝ本ゝて後ゝゝ夕顔ゝ
准へて至ゝゝゝ又ハ爪の数白花もよりす〻て蔓数

御傳曰是ハ時の珍花を三本として後より久世
准へて至らゝ又八瓜の類白花なり〜す〜て蔓類
白花なれハ巻の意より多るゆえ也捨扇を活るゆ白扇
歌と書てとゝふとせあると心得〜
愚按小車花又射子是等の花八必夕顔の巻〜
なくて元あるべき花也又うけぞ〜ようらく色
とゝ花をゆく長生殿の羽をうち〜枝をゆ
樊也きゝ〜てうらくの世を祈ぶて五十六億七千
一万年とおぐ〜めゝ〜ゆるゆ
うぞうくゝとこゝろ道を意そんよもふきちぎ多ふ
此歌で相生松生るとせあり又長生竹一万年青
生るゝ不老門前日月遲　長生殿裏春秋富ト云句ヨ
よりゆる也　又水草　牡丹ようなる地と云説あり　又鶏頭とうのかゝ夢
菖蒲　菖太、をぬきてと云説　あやめ太ゝ菖太
以上皆夕貝巻中の景物也　紅花　くれなゐのはなをぬきてきゝ色
なりけりうらんと云説

若紫

御傳曰立のびゝる竹を生中段ヨ白黄の花を活
其下ヨ紫の花を活〜巻八ゝ〜ゝつ〜やゝさん
るゆあり上の無ハいぬきゝ友みゝ〜ゝる雀ヨ准ふ中段
の花ハ北山のゆゝ上の衣の色ヨゆゝふ下ハ紫の花を
をゝて むゝ〜ゝ活ゆ ハ ゆゝ也と心得〜
愚按曰藤を活るもよ〜　若紫八巻壺のやめんあれ
バ也　又松　松のとゝとゝとゝふ　又柳　柳の者とゝふ　又藤　藤さゝ活ゝ
又桜　桜共ゝ活ゝ　又竹草　數品活竹ゝ云説あり
以上若紫巻中の景物也

未摘花

御傳曰是形ハ真木ヨ赤色の花を旨とさしたべ〜
下の方ハ何そも外色の草花をさしたる也物語の意ろ
ゑふと心得べ〜

愚按曰未摘花ハ呉藍とふ名ノアイこれを
名ノ十井と云也 紅花とふ是也 日本古名「ヒカケノアイ」
とふ也 日蔭藍と書也 三孔とも 紅花ハ活華ヨ也好
〜〜まバ未赤き花を赤花とて紅花ヨむそろふ
也何の花そも 紅のとれ伝を以て〜〜 又蔓類を
活ろ習あり象の鼻ヨ名とふ 又華ぐれの椿 華花
の杜丹 芍茉 又蓮ろとを活ろいつれも白花ヨ〜
是を月ヨ名とへてう 又云のいざよひと云事あり 是月ヨ添
頭中將歌
もろともヨ大内山ハいてたれと云ろ心せぬいざよひの月

以上 未摘花の巻中の心得景物也

紅葉賀

御傳曰此形ハ紅葉也大葉二三數あらふ〜是ハ舞樂
ヨ神ヨ准ふ極意と云ハ水板の上ヨ落葉五七枚下座のさ小
ちゝて至尾〜掛花ハ花入の下通ヨ赤五の少した、
ヨ也心ヨ集て意也 芒伝授の事也 ちやゞと生ろ同意
也と心得べ〜

愚按曰桐我生ろ縁あり〜桐壺の帝の御かたれ也
又菊もよ〜左大將をちて此前の筆打てかざ〜 智恵
ともあるこれ〜葉蘭を生ろ也多あり 芒ハ青海波ヨ
ヨ也あり 春ろハ楊貴妃とふ花を生る
か〜人の独ろ〜ろ 紅れど立ちのようけてたのれハ

よせあり　春ハ楊貴妃と云ふ梅と生る
かゝ人の能あることを云れど是ものつけてこのそれハ
是ハゲイシャウウ井の曲と云ふ舞ことゝ又撫
竹ヨ竹のヨ若竹ちとも〳〵　記の記と云ふ　射干　又
枇杷　琵琶くと　以上紅葉の賀の景物也

花宴

御傳曰此花形ハ櫻也アシライ　檜扇シヤガなどゝ
射干　鳥尾を扇ヨかつとると心得〳〵
愚按曰花之宴ハ紅葉賀の次の年の春なれハ若楓
一疋ハ櫻とすべきもよし又藤もよし　さてその荻原
氏さうめ〳〵き落ちやと云いの芝つぶのあらをちひ
うちひらもこあき弥ふと云ふもよれり　又折ヨ
櫻　折ヨ白樓ちど活ちもよし　脇月物ヨ志く物で
ちきと云ふ歌よりて花を春月小准ふ　大華を用
もよし柳花宴　春宴形と云ふ舞ヨるふ又中ノ明
活ちもよし三の口ちとふ詞ヨれり又竹花あ
活ちもよし　くきたちと云ふ詞あり　小竹を活もよし
小ざゝちと詞あり又水上の月と云ふ活方習あり
廣ヨ花の彩うちもよ活〳〵　高ち元の月を少ヨ
うちうちと云ふ詞ヨれりいても春中の景物
ちれハ心得ておちさを活〳〵

葵

御傳曰此形葵二本同〳〵　言さゝ生鳥尾をあらふ〳〵
シヤガの葉沙汰出べ〳〵車角の形也さて時の花何も
未と同〳〵やうに撫ちて是ハ多け競と云て外の

赤と同じやうに接ぎて接ぎあり是八月競と云て外の

榊

御傳曰此形榊を真木として時節の花を生べし但花二色を以一色八高く一色八低くこの木の嵩ゆきさし茎より生じ候八九月七八月と心得べし

愚按曰文杉をこの木と云もよし羊開也習あり夕月花を香やうに月に准て咲もよし又白花をさし出てと云詞よりも生る也秋の末花と云詞よりも落尾花かるや等もよし又馬薬もよし八十日の物語

花散里

御傳曰此形卯花也又時節の珍花を一輪生る也其前に糸芒あり此也を陰花より卯花八時鳥とうら屋

珍花八三の君糸芒を琴と心得べし此八可有と愚

愚按曰糸芒を琴と准ずと雖も時節五月の頃なれ八糸芒八秋也フト井萱なと琴に准ずべし又桜もよし桜風といへば琴のことなる色古歌

此事ハ桜風よりいとの事なり

是を桜風と云ハ琴に准ずる習也又蜀葵を活るもよし

少木にハあらぬ並樹にて蜜柑のことも如諸説

須磨

御傳曰此花形狂ひ桜也是を礒別雲と云

花を活根元床の左に赤を床の右に白を活るなり

英別海途とうら屋の根本左に行八須磨右に行八明石

いづれも物佛く生ると心得べし

愚按曰左遷の時なれ八佛く活る習也此三月

なる也紫の色の花を遠く活るもよし須磨の明石

[illegible]物[illegible]く生[illegible]と心得[illegible]

愚按曰左遷の時なれハ淋しく法ゝる習也ハ三月
なる也紫の色の花を遠く法るもよし　須磨の浦ハ
紫の上ハ花おもしろく法る所也　磯別雲に杜若をとよ
又何ゝも真木のうゝより艸花さゝ　うもよし　柱ぐ[illegible]
面白とふを法る又白花を立く法るもよし　曉ゆく
いつる月とふを法る　桜　春のさくら　竹　しけのくき　松
松のもゝら　芦等ハ須磨の家花のもゝきを也　以ここをハ

明石

御傳曰馴磯松根本床の左木末床の右に行ゝ生な
裏の方に時節の花をもてきあらふ　左ハ須磨右ハ明し
と知べし海近里の一里ハ左なるそうの前也芦を右前
なる也須磨明石ハ浦の傳也時芦の珍花ハ入道の娘とする也又
杜若もよし

愚按曰鉤舟よし　あゝの入道より第四ヤ源氏を
[illegible]てまゐりて出迎をとゝてまゐる和と歌ハ三月也
追風とのれハ舟ハ馬蘭を真帆よいるよし　又蔓新
を法る是を浦ゝの花とふ　松と法る芦ハ住吉の
神のおもれやおもれのひんと[illegible]ハ白よりまゐり又遠近の
花をいる　をちこちとふをあり　又芦のたゝ[illegible]
法る　松傳也あゝの入道のむすめ六月のころ[illegible]
[illegible]を御沈をきて八月ハ都にめゝ[illegible]され[illegible]也
又波越の松とふ法方あり　芦の下ハ小松を法る也
[illegible]なるもおもしろ[illegible]を[illegible]ハこゝ[illegible]

漂澪（ミヲツクシ）

御傳曰若松武本時節の花赤白二色生法

漂澪（ミヲツクシ）

御傳曰若松或ハ時節の花赤白二色生居へし　此義ハ
よしとにさゝく水草ハ澪標（ミヲツクシ）ニ縁あり歌ニハ身をつくし
といふによみかけ又出水の大尺を知る杭を澪標と云也
愚按曰源氏都にめしかへされ給ふ程ちかくなりての御位ニ成り
又権大納言ニなり内大臣かけかふりいとしく栄給ふ祝義の花也
芒を添る一本ある枝を用芒ハ落雷の躰也　又松ニ小車を
添るもよし　松原あるり小車見て添ふるくとあり　又舟
もよし　難波の方ニ舟さしとあとあり　但舟ニ被せめるかる
難波の舟とあり　又竹の親と子をいるもよし　三月
十六日あるしのえへハ姫君うまれさせ給ふ　其七日の祝義も
祝義の花ニ用ゆへし

蓬生

御傳曰此形蓬を二本として時花の珍花を添さはへし
又ハ蓬々山藪（ヤブ）山々やまともさし交てよし　此は青月也
愚按曰赤花（末つむ花）をさし　蓬をとめ子なにもよし　芒も
花ちる里の方へ五月ばかりのころにおほしける給ひさるとき
蓬あはくよもきの薄茂げに入るきあり　馬のむちまとく
露わけ入らひて入る事ふとあり　又蓮の葉を　笠と准そ
又此くきを生るもよし　狐のすむと云詞ニよりて
云まふと華すと生るもよし　かつらうつくしく九天斗ある
有さるを御かへる事とて侍従かひし　なすはすを
ありけりと

関屋

御傳曰此形真き同し花其中と外の花入…

関屋

御傳曰此形真き同花其中を外の花又ちやうもさし
きゝも是外の花とハ殊ゝ事こゝ此形ハ却てそれを用る也
関屋の意也人目君ひ弱ひ　心也花ゝ花
愚按曰いとゝ殊ゝ花を行会ゝ習ひあり
又さゝとゝ欲ハ多ゝ先ゝ行会ゝ
清水ゝ水草を活もち

繪合

御傳曰二重切ゝ生る也木ゝ上下木草花ゝ上下共
花と心得一上下ハ違ゝ用ゝ生一繪会ハ生ゝ
会いゝも又花入二ツもさゝも此三月十日比と心得一
愚按曰弘喜殿と梅壺と繪会あり二瓶にて一瓶ハ
紅梅梅壺と云ゝ一瓶白梅こゝきゝん　さて源氏のさ多
ゝ寫一弱ひ一繪ハ生ゝれ弱ひく勝強ゝ又若紫
の上三のうゝ杜ゝ三瓶のうち藤を活ゝ習ゝ
（又杜若）

松風

御傳曰明石のこゝあり（赤松長ゝん恋ゝ生一又み
のさゝきとて切ゝのすききゝいさゝ功者有一むゝきゝ
ゝ若松と生前ゝ杜ゝ接長ゝ女郎むゝと生一はまゝ
大事ゝ
愚按曰尾ゝ外花をあゝふ二三年ゝほと他の上め
ひのゝゝふてゝかゝまるゝこゝあり尾ゝ他と
ゝもと用ゝ　松　於ゝ

白花月ゝもあゝうれハ
あゝと水ゝ

芋雲

御傳曰炎形時節の花木より秋でゝ冬尾家り又、八月
まめらかゝの如く生る也花を夕日と云てきを色をひく字
と心得一　花を春也

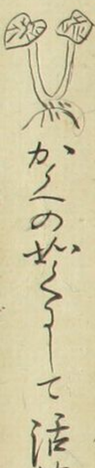
愚按曰藤をいふもよし　かゝやく日の宮よりあふ　又日天下
涼園の叶ふれハ花形さしく〳〵いるる習し　又揚をいふる
臣家のみへのさんら一心あゝハとて平ハすゝをめさけ
と云ともよかたち形ふ不あり　巻中の景物ゝ之のゝ一

槿

御傳曰花形ミき羽鳥也木ゑまゝ沓やゝ法一　其
心あれバあゝき色又木の花ゝる養を開まてを用ゝ
あさゝのさしめんとて式部心の姿ハ姫君かものいつきの仮
ゝくおるあさを形ふ也故ゝ紅ゝをまとゝ心得一

愚按曰槿とゝふ名多し　木槿（モクキン）　材綿（アサワタ）　挿揆（アサカホ）　又
牽牛花（ケンゴノハナ）　藤バカマ　コレモ羽鳥の名あり　いつれも通ひて法
一一又心つよき故とあるこよりて白色の花ふもよし　いづれの
巻ゝもつれるき色ハ白花をいゝる色ゝ陸ぬとふことゝり
槿を法る　槿室とゝるゝ形ふ　黄白のゝ　ゝゝのゝ
ゝ脈のいろゝふ

花形ハ嫌ふ事ゝれども炎花形斗習ゝる也シャカ
車の脇立ゝ唯ふ長柄とゝ一　尤真木両方同木花ハ桑花
をゝゝとに朱雀院の一のゝゝの姫宮ゝ　六条のゝ宮ゝ
との車ゝゝ形をあゝゝ一　故ゝと心得一

愚按曰葵とゝふハ（諸ゝ　露葵　眉菜　花菜）ゝも二葉艸とも云草ゝく

かゝのゝゝゝて法花ゝ用る葵ゝハあゝゝに葵の

との車にて正をあらそひ故なると心得へし

愚按曰葵といふハ（諸々とも二葉艸とも云草なり露葵眉菜に言）

かゝの花を用る事ハあゝにかゝる

祭ハ宮人の冠の髪（ウズ）さしに成也

蜀の姫〜御傳の

葵といふハ（蜀葵と云艸なり花葵錢葵ともと云艸なり戎葵 吳葵 ヤラアフヒに云）

然るを葵の名通ハ故ハ蜀葵といふと知るへし

此巻ハ松竹を活る習あり

源氏祝（たうのあき）ハ所のうこのみちかさのかひゆく世ハ口ハ（ハ）

さく竹を五尋の活といふ松ハ（ハ）海（ハ）雲ハ准也

又護摩（ごまき）ハ（ハ）香氣高き花を活ることの習あり

又ちのぶ艸（草艸の一名也）の又紅白の花を活ることあり

源氏賦をぬぎ〜（ぬ）かぐ又時雨柳を活る是々

十月のとるれハ時雨ふりあれて夜ハ夜をもよをすとふ

習あり又猫柳を活るもよし是を「みゝのよ」紙のと

ふるとゝ猫柳を絹柳も柳もちゝもいして従の也

又菊をもいる是ハ新松とゝ習ハ

菊松とそ菊を松ハ入て其香を栖ことゝや塵も立ず

御傳曰

此形大菊ハ小菊の絞るものゝ大菊ハ乙女の舞の袖

やさしきもハ舞とる〜花形ハ今人の心形ハ月

に八十一月也と心得へし

少女

愚按ハむらゝとおもひ出られる情あれハ梅ハ梅ハ

世ゝを思ふる伊勢物語も

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわがゆへ身ハ春ハ

又神祇の花也神樂とそ葵人あり竹を活る飛天といふ

菊を八サミ入〜是ハ二ツ井のことといふ故也又六条京極の

あゝ四町をとそ殿つくりして此殿ハこゝろくのたの人屋を花殿

華を八十三人（一元八二年）の上といふ故なり又六条京極より
五条四町を云て殿つくりして社殿よこゝろくの六の人座を施設
し世と行ふ

春菊木　左の方のとふ　卯巳　家つゝ　次の巳の方　下ちき沢瀉
寺の巳の方

立葉の松　冬の巳方　外は紅葉を植て其葉を筵のごとく
入座を設ける有り元八郎家にて此使あり（略ス）
さてゝ〻ゝまつ園八郎やとの郎家と風のつけてゝ〻ゝよ
とふ音こゝろ以上廿女髪中の景物

五髪

御傳曰此形木蓮の花形時花の形なり（三本の花）
霞ひゝゝ敷して活る歌ゝゝ
なる世て活る八此心也
愚按曰撫子を活る習あり五ゝゝといふす幕本の巻ゝ
物語せ（撫子のこと也）（舟ゝゝく花器）活るもよし早船その色
ちる也と行ゝ又梅をいるも習あり　初陽ゝ手ゝ活ゝと京
ゝゝ行ゝ貫之の歌る人八いさ四ゝ考ゝといつも此
初陽ゝのゝ　又杉二本いるもよし活をいるゝ
初ゝのゝ杉のゝちゝを活ゝ八妙ゝ河のゝ君をこゝまや
といふ歌ゝ行ゝ　以上ゝりゝ巻中の景物也

初音

御傳曰こゝ正月元日歯ゝあの花ゝよゝ　五形也
梅をこゝまゝて杉を留とし時ゝのもを蓬生る巻歌の
心ゝ考合て一
愚按曰黄花　福寿草　山吹ちど正人て黄ゝ准ふ
ゝ月をまつゝ心ゝて行ゝ歌ゝ　又柳ゝ生ること
ゝあり　柳上ゝ芳花といふ詩ゝ　又柳の下ゝ水仙ゝ
ゝゝゝ氷ゝ解ける歌の心ゝ　池鏡ゝ薄氷の待ゝ

と月をまつよりなりてといふ歌に侍り又柳に生ること
なり柳上は芳花といふ詩よりあり又柳の下に水仙とも
とをることを氷とけぬる歌の心に沈鏡も落氷の侍るいと

胡蝶

御傳曰此花形一種一色の花をハ怪の花形のごとく活蔦尾の
大事をなりしに前より時節のもとをいろく前ちより生しく
あらしめのごとく生也前の花八八色生るをなとに活二月より
三月の比也と心得べし

愚按曰四季の山侍経あり伊花と心得べし六八色の
むらさきをまぜて蝶ハこうもの絶より山吹の赤せ
是巻中の眼目と知べし　又舟あそびあり二度也色八色のうち

蕊

御傳曰此形赤花を多く生てうしろ向よりむの色
赤き黄の花を多くせる也花ちくこえうれよりせる姫
百合　唐子夏きんのうけ唐菱類　卯月四日
柳也　時節の絶景色と心得べし

愚按曰赤黄の小花を蕊とそうし侍る御傳の色
よく変化ちつゝ妨君を無部のゆ妨君を限ちく
ゆんよりみ弱ひ蕊の生ちる先ほのるえまるはるおと
又落ちる時防花を姫君の四つのちすぐれたる
まれよ准へ一つく生て留よ小花の赤おを、ちもし
又かつての親王を活和天皇の寸五のゆ琵琶の上を
でゝ蕊と相づるのこうどと寸五とのけり侍る撥把
活ちもよう　又ゆ八四のとて四の弦多れバ蕊よ
小花を生ふと葉井ち山笑ち四房を活　みあり又

活るもよし　又琵琶ハ四の緒とて四の緒あるなれバ蓍よ
小花を生　ふと葦井ら　山笹ら四房を添活へし　古の事あり　又
几帳のすきうげといふ事有り　前に花なきこ事といけ
おくに小花を活る也　又あやめの葉といふ詞によりて活るもよし

雙笈

御傳曰此形幹を撫子とし　多く生山がやの類芒
もよし　前の花時節に随ひて留とし　冬尾花或いや
枯る〻を交てもくるしからず　活ハ五月より六月を旨とす
愚按曰又やまと撫子　唐撫子二本活るもよし　咲きる
花形なよし　巻ふくみ有り　又水草　杜若に胃（葦ちなとも（菖
よし　かも河かつら川より船（呉ノ名）いしぶしなどとよむと云り
又竹をいけ奥尾を八寸入れて撫子活るも此意也

篝火

此御傳赤菊二本花入なども又とらやらにわけて活る也
むかしのつきてもくるしからず　衛士の篝火の心なり　大菊
二三枚あらふべし　鳥尾もよし　活ハ夜の花也
愚按曰夜のよの月なきには篝火をともして琴を調
させ給ふと云詞よりて松を生ことし　留に赤色花を
活るもよし　松を琴とし赤きを篝に准ふ　萩の秋風とふ
詞あり　萩薄も活て縁あり　手枕といふ詞あり　夜菊に芒の

野分

御傳曰此形曲松に留かや　此花の類をあしらふべし　大風
吹きてる気色を生へし　松一本ら枯芒もよし　此
八月なれバ也
愚按曰雲井のなかにいとこの姫君を隠くし　[illegible]の大将

吹てら氣也色生し　松原うら松花もよし

八月ちれハ也

愚按曰　雲井のかれいとこの姫君をいくゝ度の大将
心とのゆ行ふあり竹を生る石の菓を上の裏に八せと入し
又文紫のうちて　ゝの流也　落紫の花ちり又荻を生るハ
荻の葉ちる風とふ物ゆ行又芒ゆ霧ちるを
流ハ世ゆ村雨ふるくる所こ　又琴をひゝ　の中方
弾しふ所あり　松をうゑ　ゆ　又明石の巻の意
もふくゝてゆ

御幸

御傳曰此巻の意ゆ老ゆ若松ゆ時節の木花を
ら　ハふきた無ゆ　此八十月大原ゆ行こ
し行ゆ也

雪ふるまゝ　の山ゆ　はしのふるき添をもきふるゆ
愚按曰　行幸とハ摩特ゆ帝のゆてまし　ひをふ
さて　石山とふ　小松を流る智こ大原やゆ
の山の小松原もいふ　ゆ又雑子を景物とし
班　のものを流る先を雑子ゆ何ゆ入の
茶木ひ　又ふるゆあとふ　古木ゆ苔ちどのつき
ふ　松杉柏かゆ竹ふるきあ　ふ叶ふ
梅も又ふるき海ゆふ　ん又白花を多く流
もち雪のふ　きゆ雄ふ也

蘭

御傳曰此形藤袴を幹ゆして赤芒ゆ　此の菓を
あ　ハ前後二揚ゆ法　方芒ゆ
あ　ハ同ゆ　ゆ幹ゆあ　ら
前のゆ　ゆあ　ハ法　ゆ

あらしも同じやうにいくしむらの幹屋なあらし
前のこまゝ屋なあらし塔和歌抄に活し
愚按曰蘭をフヂバカマト云群芳譜曰蘭ハアフギ也
紫苑花をフヂバカマト云也此説コヽニ学ブベシ
蘭もまた紫ハ活くしる也　又蘭の花のいと好く
咲くをとゝのの由（さしみく）はをとゝてやをいさゝ引
こゝ〳〵を云云此蘭といつるもランなハあて藤（フヂ）なる
を　又糸芒太菌（アヒイ）　トゞサかとを活てよし芒を
簾とゝることと知べし

真木柱

御傳曰長春を幹すゝく拾ふる大葉あらしを芒ハ恨述懐
の意を含て茨あぎとゝもで針ある物を活る事を又花ゝ
柱を多ゝと此巻より起草と心得べし
愚按曰此花形球容貴人などの初會ハ活べし又容
ゝ数説好あれハ活べゝ　又歌を書物ゝ紙の
色ハダイ色（射干の花の色と云）　俗名檜扇を活し
此色を作る花何ゝもよし　又赤色の花もよし
ぢちりもやをこれうんと活べしよりう又柏を活
ゝ　ゝ　柏木と　柏ぶひゝく　たてまつを
ひゝ

梅枝

御傳曰此形幹白梅をかぎる也　あらひを又大葉ゝ鳥尾
かゝ　外のあらんなし　正月唱ゝ源氏のおとゞ（大臣）
六條院ゝく薫会あし巻也と心得べし
愚按曰梅ぶをよ　ゝつけくらんちをのつぐ　薫れてとあ然
此ハ紺色の花　雁頭　拾捷　ゝともよし　又五葉の松よ白

愚按曰梅ぶえよ丸つけくこんちをのつぐ蕙れてとあり然
共八紺色の花 鳥頭 桂棲 るともよう 又五葉の松は白
花もよりまきつかは蕙入てこと 又花のもとをきぬいとも
むすびさげいるも ゆあり 又杜若もよう 紫のもとをふ
又竹草 槿もいるも
ゆるしとあるとくもきちそこん花のもきを若とる花

藤裏葉

御傳曰此形藤ヰを法るも也 陰陽の葉 立葉ゆるひあり外の
あらしはるは 計なよ庫より生るる必あらしをれ〳〵 小
いるも 藤ヰ法るる 許るくてハ法ること無用 ゆるる
四月と心得一

愚按曰雲井の厂の姫君を久方の右将 みとの殿むすよう
おもひかくとの父おとゆるし給ふと 行よ杜若也

さるし必飛厂をよきり入る一 又桐を生る久方の 唱よる也
又朱雀院 行幸 ゆるるよ 長藁を冠のさををく
しあふと云所をいる也 兼二枝 ㊀ 中ヰ上云 ㊀ 上をかくと也 是八
ゆるる也 又三重上よ 藤中よ 兼もの 下よ小草花
と法るを 行幸と見る也 上の藤を巻の名也
月四日宿 下八白丁と云也

若菜上

御傳曰此形幹若杉よ 然 笹の歯朶の木のあづ葉と前よ
あらふ菜の葉と少し留まらふ 此花真ゆ
祝儀ものも 二月子のとく 七ものとし人日とて 此八七種の粥
小松引ものと云 儀式也

愚按曰源氏の御賀也 四十二の年 ゆり花言を子りとに
初子の日とゆふ八初也 仕侍あり 舟 松 住吉の景を法る

小松引なと行ふ儀式也

愚按曰源氏の御賀也四十二の御年 正月廿三日子日なるに

初子の日といふハ初音也上代もあり舟 松 住吉の景を請る

縁あり又新殿をきつむてといふ 新しき四季の花もよし

若菜 下

御傳曰此形輪よる鞠柳 定法也 形の糸と云て柳の枝一本

花籠に活くたるも此枝を書とた猫の縁よるとへり此花

柳云と付ハ外のものをかりく生くまりのむきを請るよハぜん

柳ノ華やきをつけ花又ハなをし請ると書とた沢なし

花と心得へし 十月廿日の御賀也 此巻傳授ことた

愚按曰 神祇の花也 何れも住吉の社の松と行ふにれり

大葉浦浜に至て活する事あり舟に枝とある事なし

須广明石難波のたよりを尽すくと行ふよれり 又

鞠あそびあり 花の赤き色の大ハ花を活るに習あり 蹴鞠

緋色也 又かくりといふハ鞠場に松 桜 柳 等のものを植

柳にかきる事 さらんかくりの桜とも謂あれハ小に鞠といふ

桜なと活る事をおもろし 又猫の縁なくみてあぐるこハ

此語と元にまふといふ 故にあれバ猫柳を活るも縁あり

又春のなごれといふ詞によりく 柳桜の花を夢て請る

花を活てよし 五十の御賀とて二月廿日あまりの事 花の花のと（源氏）

かよふあいもよ御遊ひよびまうく御楽ありし花を女楽といふ

女三宮きんの御琴 松ノ糸筵 紫上 和琴 糸筵六本也

笛ハ夕霧大将の御子 竹を生る 竺等ハ楽によれたるを云

又女三宮のこそて 青柳 青柳のたつまさら始てうぐひす

羽風もみだれぬへし 又女御の君の御衣ハ藤こそます

よりあるをみなゑひなく花さかれる屋の花の花てよし

あてなるのふ 又紫の上のこそてハ桜梅よるとへうり

羽風もうごかぬ　又女御の君の出給ハ藤こそ宜
よりあるをよすがぬしなくしてきこゆる屋のかゝりてよ
あるそのふ　又紫の上のうへハ梅桜よりもてう
是等ハ御りうちのめでうきよる見その花といふ

柏木

御傳曰此形大葉ヨ時貴のひを時西笠の形のやうに大葉
の下ヨ生る也祝義ヨ用ふ至るべ柏木女三の宮の事故ヿ
病りぎりふ有く　いまたのをう大納言ヨあさるとゝ
愚按曰其心をはのあるとしめくはんよりあるべ
をし弱ゝよりゝ云云　竹葉　柳葉　皆酒ヨ　さゝ
宮井の一ヨ遺言ある養ちれハ花ヿを落ヿる　ハサミ入七
少しあるかゝ　又岩根の松といふ活方ヿ
活ヿ芽ヿ生ハきしと人をくいく見るの松をこん
右廣ヨ松を活岩をとある也　又鶴競べとそ　榊と二本
さしをとり　習あり　工瓶も又ヿ　両方折也

横笛

御傳曰幹竹也　竹二本節の上一寸三番　祝至切留も竹のふし
の本枝ヨ葉七八枝　金ハ　ぬくあらぬまハあく　木花　神ハ
木ヨ通用の松を生　前ヨ篤尾三本も入のはして　墨を
見をとおもひ葉をて定て習ひし　此形ハ一重切のも入ヨ定る也
ひとゝきう　尺八も　其うしろ根也　竹を用ふハ横笛ヨ始
（唐ヨ銅簫と云物）
と心得　八月十五六日の比の事也
愚按曰一節切ハ　一ヨ　一ヨあるる尺八ヨ似る笛也　ものて
ハトウシヤウとふ赤壁賦ヨ　（人王の天皇）双鳥連の曲を以
弱ふ　又薄　草花數　活ヿもよ　笛を虫の音といふ
草あまし　活れハ自然虫のこゑハこゑと心得

ゆふ 又葉 草花數〻 法もよし 笛を虫のこゑといふ
草あまた法れハ自然虫のこゑハこゑなりと心得一
ゑをきき葉のやうにいとしの秋のかゝぬしのこゑれ

鈴虫

此形を御傳ハ草花半賞玩とする也 上の山蔭の蕣
千づま大事也八月十五夜の月とる一 養曰月の光
をこゝろつくるかきりなくあられハ山伏院ハこゝぶきなる弦てと
あれハ也

愚按ハ白菊を云く法もよし 又白花を月とする
也 又鈴蕣をいふ鈴むしこゑと
心得一

夕霧

御傳曰此形大葉を横ニつゝ其下に垂てきをふせ
芒無時ハつゝ冬れのゆゑ也一 花と
時節の印法一 大葉垂葉の心とする也 秋霧
愚按曰霧を伏ハ横ニ也 扶桑ハ横ニ也
きりこめ 桔の葉ハ 秋の夕れ 此外夕霧
ハ 又指稱ハ時ハ 桔ハ
黄葉 秋草 扶桑ハ横ニ也

御法

御傳曰若松ハ老母 小菊留 又幹竹 仕立也
孫生十四の事と知一 芒ハ紫の上 大事
千部の法華経 大法會 心得一
愚按曰芒ハ蓮を法る 也 又早咲のかきつばた
ハ 紫の上 ハ
但 又紅梅 梅を 形

[illegible]

俱に祝儀に用ひらるべし　又紅梅　梅を　形ありて

[illegible]二種ありて　二種ともに[illegible]あり

紅

御傳曰此形無常の花也蓮の艾子の[illegible]

生ずる也其外生ずる迚も[illegible]く生ずる也故に常に活ずる

輕く[illegible]花も[illegible]人あれども[illegible]も[illegible]違ひて多く

[illegible]常のもの如[illegible]と心得べし

愚按曰かくこの紅梅の[illegible]の[illegible]紅梅を活ハ

此[illegible]し　梅[illegible]　[illegible]山[illegible]　皆[illegible]　又竹

を活ず　[illegible]　卯[illegible]　皆春の[illegible]

白宮

御傳曰此形[illegible]松二株也あらひ時[illegible]の花床の[illegible]の

方[illegible]松[illegible]　此花ハ真也元[illegible]の

[illegible]　[illegible]　[illegible]　半開[illegible]と心得べし

愚按曰梅梅[illegible]の[illegible]又三の[illegible]

[illegible]ハ[illegible]の梅を[illegible]　[illegible]ハ[illegible]梅を[illegible]

[illegible]ハ[illegible]藤[illegible]　紅[illegible]

[illegible]人[illegible]　[illegible]　皆香物を活ずべし

紅梅

御傳曰此形幹　紅梅[illegible]也あらひハ大葉[illegible]

[illegible]　[illegible]時[illegible]の跡[illegible]留て生ずる此大葉[illegible]の

とハ[illegible]　此も真[illegible]ハ二月と心得べし

愚按曰心あ[illegible]風の[illegible]の梅[illegible]

[illegible]べきと歌を以本文[illegible]歌の意とたゞやゑ

[illegible]心得[illegible]　又曰紅梅[illegible]竹を

愚按曰心あつて風のふかハたる梅はたんぐひ山のとえ
ぎやうべきと歌を以本文なれとも歌の意とたゞやうべき
らるゝとも心得べし又曰紅梅と竹を
いるとなり竹川と曰養の論あり

竹川

術傳曰此形幹葉付竹二本時節の花あらハ一竹の
上第に一寸と一本に一寸五歩とも切一切八三月也
囲碁の勝まけものうけ物とふをあり
愚按曰竹川は竹を活ることなれとも竹川とハ神事の
うゝひ物也と心得てよし竹川とふ名所もあれとも
神事歌也囲碁のさゝ空蝦の巻考合せて活一又碁
のみ物とハ桜とうけ物とて碁をあるとあり桜もよし

橋姫　中位十位十帖

御傳曰此形條をあを活る大葉ものを幹として生る也
ズハエ花を咲ハ其木の花を下よりあらハ一花咲時八外の
花をあらハ大葉物の態無と活一おとむらん柏ちん
ちやうの内スハエ梅桜枝多し又橋ともいふ也
愚按曰白花を高く活るあり（白椿白牡丹を用ひ稚ふり）
よりとハ其年の月をまもりとくよりに
のやさしく折りふし事するとあり又黄蘭潤
ちゝて笙の琴いと弱くおもふて川なとのひき
松の風おもふあひくるうちして馬ひきとゝて中活ハとも
馬蘭河蘭ちゝ松もよし太蘭もよし笹ハ
駒ひきぎと云草あり花を活る事あり

推ゝ本

駒ばなぎと云草あり それを活る習あり

椎条

御傳曰此形幹八生木なれ八生木生まれ八まとくなる
れ物ゝ手物ゝ添て活る也 其下ゝ葉花をたのしむ也
無常の花と心得〳〵 此八秋也
愚按曰四季の内念佛ゝ山〳〵入ばんとやちどさ葉花を
六枝活る 六字名號ゝ名ゝ又翁竹 羞 白頭翁
とゝ竹もよし 老とけ八ゝるこ八ゝ入ゝるゝと契
ゝ形ひ〳〵 半ゝ竹ゝ此巻頭ゝ竹ゝ此ゝ 又梅
を活ゝも なゝひゝ初春ゝ梅ゝ枝ゝ
なるさて初春ゝ梅八縁ゝ花也是椎条巻中の
意味深長なるこゝ也〳〵

総角（アゲマキ）

御傳曰此形身木尾花也松ゝ時節の草花ゝ也
尾花机の四の隅ゝ付ゝ林也尾花四本活ゝ笹ゝ
四ゝ嬉ゝ故三本活ゝ也 此ゝ秋と心得〳〵
愚按曰ゆゝ形を活ゝ聖徳太子の総角を
云さゝ也と云ゝ秘傳也 尾花を雪ゝ 下ゝ小松を活く
ゝ〳〵山里さひ〳〵く活ゝ心雪ゝあとゝ尋ひくとゝ
宇治川 紅葉ゝと云詞ゝ 蘭 紅葉ゝ

早蕨

御傳曰此形早蕨ゝと活〳〵蕨穂ゝ出ゝ
ゝ又ぜんまいゝこの系一色 色性活も代用ゝ山がや
君ゝ竹も生ゝ也 此ゝ二月ゝ心得〳〵
愚按曰早蕨ゝ初ゝ也 穂ゝ用ゝを活れ八詮ゝ
ゝ〳〵又竹を活く活 飛ゝ活ゝ下ゝ蕨を

君ふ仲も生る也 ぞろ二月と心得べし

愚按曰早蕨 初てびせ穂の開るを活れハ謹る

べし 又竹を主く活能ハを伐て下に敷を

活るより 岩の苔の立を見捨るといふ汨五の功ハ

よりもてり 又柳枝を活るより 都にぞる意

もつ也ハ柳さくらをこき交て都を出のまきこる

と不敬よりて柳枝を活れハ都のことゝ成也 また枝

と枝を活れハ禁中のことゝ成也 源氏巻中心得とす也

寄木

御傳曰此形ハ陰花の物を陽の座に出て生る則寄木也

「旅寝いとさびしき事」とゝふ歌の心也 是ハ寄活る外の

形も有事也 ゆゑハ竹水仙の類ハ陰物也 陰の物ハ本の

右手定座也 花の陽座ゆゑ伝て中より座也 夫れ乳

ものゝハ陽花にして身木と花入との間にをきて前に出

所ゆゑ 幹ハ右座ゆゑ也 物ゆゑあらひを同陰物

ゆゑハいやゝあらふてもやとり寄木也 能心得べし

愚按曰寄木とハ木の股或ハ凹(くぼ)より他本生ずるを云也 然ハ

二宜切ゆゑ木と木一色に活れハ則寄寄木の本躰と成也

されハ御傳の置所の左右の論の外に花形寄本とる心

ゆゑ人中央にて主意ゆゑ也 又白花をも活て上に

立花の月もやゝ出たるのゝ心と泊こゝ有り 又松を活る

歌ゆゑ有り 又玉の出を活る歌ゆゑ有り 又葉を活る

歌ゆゑ有り 又玉ゆゑハ花を出いる也 次のゝ一葉の玉

ゆゑ つゝて花の寄一所ひて其面笛を吹活ゆゑ

ゆゑ有る因也

四阿

御傳曰此形ハ立合

是によれる因也

四阿

御傳曰此形ハ葦を幹とす枯るゝと浦へ流る系芭
時節の花をあしらふべし頃ハ九月と心得べし是ハ
母左近の少将と云人をむことらんとせしをことわられハ
聟取の祝義ニ用るもいかゞなり

愚按曰 宇治にたてしてとあれハ茶の花活てよし
すべて桜ニ芳野山をむすび 紅葉ニ高雄をとりのぶ
風雅のことなれハ茶の花を活て宇治をしらする事
秘傳とハ又車ニ縁あれハ其名の草花たるべし
べし

浮舟

御傳曰此形大葉ニ而船よそほふべし 杜丹ゝ桜ゝ梅桃ゝ
杜若百合よろし 又時節の珍花ニても大きなる物よろし
愚按曰暁ちかくなりぬとおもひしかれどもさるゝ立まされおくく
と云詞によりて朝皃よし 又御馬ニて迎ひ給ふと
いふによりて馬の名のある草活るもあり
よにしらせ給ふべきさまならぬことともさもちをかきなして
かゝる事をもほのめかせ給ひてゆかせるゝをとゞむべきさまで

蜻蛉

御傳曰此形未枯のものを思ふ身にぐにて也時節の流ヒ
下ニ流るべし さく浮舟の君いづくともなく失給ひしを
白宮驚き給ひてさく 蜻蛉とハ名附られハ大和ならずことを
流るゝ事あり日本紀ニ大和の國形を神武天皇にて
なぞらへて 蜻蛉のとなめせらる如しとの語了 蜻蛉ハ則
あけろふ也其形ニ似たるとのゆへ大和撫子其縁と心得也
愚按曰

なりて蜻蛉のとゝまりたるが如しとの語了蜻蛉八則
けらふも且菊に似たりとゝ大和梅子真菊と心得し
愚按曰陽炎ハ去陽氣の立のぼりをいふ野馬と
かげろふと訓ハ莊子の理論也蜻蛉也蜻蛉ハ秋のもの也
本長ハ アキツシト云故ゝ日本をアキツシマといふ也さて
ゑみさき花 たゝるき、菓花を活るハ外らふの活
なきゝよ 和とゝふ也

三十四

御傳曰此形時節の花幹にして大葉也大葉の活る大
事也 扎とゝる也大葉ものの一枝横ゝつるしをゝ功者也
愚按曰紅梅の花も香もかゝるめとなれハ紅梅を
活るもよし 梅大しゝゝ梅ハ紅梅を
あしてと云詞よりて紫の色の花ゝもよし紫
をもつの色といふ也と心得し

夢浮橋

御傳曰此形殘花を去ゝして前ゝ活花を活る也さて
源氏一部の意ハ勸善懲惡又幻の世のたゝるき世を厭
帰本の所ゝなきゝよ始ゝ夢の浮橋ゝ殘る人間世界
のたゝるき事を書活ゝる也と心得し
愚按曰源氏の榮花も夢の如く善智識にして云
ゝ花ふ三ゝ方系のゝも果ゝ無常をゝ
抒活華の實ハ榮花を見て終ゝ枯ゝ無常を
悟る事唯一瓶の中ゝ所ゝ是源氏活花の奥儀也
涅槃經の四句謂を以花意を知ゝ所ゝ活花ゝ於ゝ
諸行無常とハ活ゝ花も見る人も皆諸行無常と
ふ意を悟ゝ是生滅法ハ愛欲の川を渡ゝ安ゝ

諸行無常とハ活ける花も見る人も皆諸行生者と
ふ意を悟ゝ〳〵是生滅法ハ愛欲の川を渡ると宣ふ
何ぞ花を見て愛欲を離るゝ也生滅ニ已といふハ
今活る花已ハ無常を示也ゆゑあるゆゑの所様
と教いつも也寂滅為楽といふ花を見て成仏する
ことを悟る也願念の窓の中三明の花を挿し座禅の
床の上ハ無色相を悟る活華心垂て情ふかく仏
の慈悲心を以主と成容とする其清浄薫香極楽
浄土の意よるゝ〳〵

附録

草木類

赤箭　神之箭　矢ろゝ用

女萎　恵義久佐　笑ひ〻用

升麻　止利乃阿之　鶏ゝ〻ふ

車前子　於保波古　車ゝ用

莞絲子　祢奈之久佐　祢なきゝ用

防風　波未須加奈　浦のそゝき用

落石　天伊可賀豆良　歌のゝ用

王不留行　須〻久佐　鈴ニ用（白芷 カサヒニトゝ云ヒ）

景天艸　伊岐久佐　命のゝ萩生のゝ用

決明　衣比須久佐（芍茅 えむすび艸と云ふ）　田舎のゝ用

天名精　須ゝ賀奈　須のゝ用

續断　於ゝ乃也加良　鬼ゝのゝ用（又紫菀 ナニノシヲヤ 上同）

徐長卿　比女加々義　鏡のゝ用

蛇床子　比留毛之ゝ　莖のゝ用

漏蘆　久ゝ久佐　黒きゝ用

茯苓　宇久須須乃佐留加岐　ゝゝ用

蛇床子　比留尤之呂
漏蘆　久呂久佐
萆薢　宇久積乃佐留　加岐
紫草　牟良佐岐
馬先蒿　波ゝ古久佐
積雪艸　都保久佐
悪実（山牛房）　宇ゝ布ゝ伎　音箱　宇ゝ久佐
垣衣　之乃布久佐

大戟　波ゝ比止久佐
鹿蹄艸　加乃阿之久佐
躑躅　都ゝ之
牙子　宇ゝ都奈之
白蘞　世乃加ゝ美
白頭翁　於之余久佐
闘牛兒苗　多知乃知久佐
馬嚢艸　久乃都ゝ良
弓弩弦　於保由美乃都留
長松　まつだ艸
白及　かぐみ艸　白前　ちくり
貝母　ちくり
龍膽（シコリヲエヤミトモ云）　えやみ艸
百兩金　俗ゆくさぎんと云
白芷　よろひ艸
萱草　わすれ艸
金錢艸（長寿のもの）　えびさうき
芍尾　ゑび艸
五味子　さねかづら

莖のもの用
黒きもの用
根　ゆのもの用
母子　紀子のもの用
桐壺　梨壺ゝ用　又吉のもの用
馬のもの用
君ふるもの用
使のもの用
庶のもの用
郭公のもの用
駒のもの用
鏡のもの用
老人のもの用
ゐちまちがるもの用
蓬生の巻用　馬の鞭ゝ用
都留　弓矢ゝ用
杉ゝ用
焼ゝ用
母記ゝ用
ゆくとやみゝ用
保氏ゝ用
車のもの用
ゑるもの用
皇のもの用
鹿のもの用
牧のもの用

馬襲艸　久万都ゝ良　　蓬生の巻に用馬の鞭とあり

弓弩弦　於保由美乃都留　弓矢に用

長松　まつむ艸　　杉に用

白及　かゞみ艸（白前芹乃）　　焼に用

貝母　たくり　　母記に用

龍膽（シコリヲエヤミトモ云）　えやみ艸　　つりてやみに用

百兩金　俗名やくもとさん云　　保氏に用

白芷　よろひ艸　　軍のことに用

萱草　わすれ艸　　忘れことに用

金錢艸（長寿の草）　えびさうつき　　蛍のもに用

芎藭　こうじ艸　　岩座のもに用

五味子　さねかつら　　牧ることに用

馬兜鈴　うまの陰　　ちぐみに用

以上

本草玄蒙小野蘭山先生の門人なり　始て写を見る也

國々の異名をのこらず集れる書なり

源氏活花會頒

松聲舞大嶋宗丹

明治十九年五月二日

中國通明殿

白及　かぐみ艸　白前是也

貝母　[illegible]

龍膽（シコリヲエヤミトモ云　えやみ艸）

百兩金　俗名くまぢきん云

白芷　[illegible]

萱草　[illegible]

金錢艸（長寿草）　[illegible]

[illegible]尾　[illegible]

五味子　[illegible]

馬兜鈴　[illegible]

以上

本草玄蒙小野蘭山先生の[illegible]を見る也

國々の異名をのこらず記るし集れる書あり

[illegible]用

毋記用

[illegible]用

[illegible]用

[illegible]用

[illegible]用

[illegible]用

[illegible]用

[illegible]用

源氏活花會頭

松聲舞大嶋宗丹

明治十九年

五月二日

中通明殿

源氏流極秘奥儀抄 行